

事業概要

- コーディネーター きょうとNPOセンター常務理事 深尾昌峰さん
- パネリスト NPO法人Homedoor事務局長 松本浩美さん
ヤマカミ計画代表 滋野正道さん
シチズンシップ共育企画 学生スタッフ 井上菜さん
プレゼン龍実行委員会代表 上原大吾さん
- 司会 京都ゼミ 村田侑子さん

19歳から大阪でホームレス問題を中心に活動を続ける松本さん、綾部市にある祖父の古民家を拠点に住民や外部の学生とともに地域の新たな場づくりに取り組む滋野さん、高校生の市民参加の取り組みでファシリテーターとして活動する井上さん、ビジネスプランコンテストの運営や起業をするための勉強会を大学の枠を超えて活動している上原さん。4名それぞれの活動を紹介してもらったあとに、深尾氏のコーディネートにより話が展開されました。(当日の内容を抜粋して掲載しています。)

それぞれの“スイッチ”

- (深尾) やりとり最初の最初としてこの人たちのスイッチはなんだったのか根ほり葉ほり聞いてみたいと思います。
- (松本) 小学生のときにいじめられていた経験があって自分のことが嫌いだったんです。中学入ったら自分を変えたいという気持ちがあって、なんとなくボランティア部入ったら釜ヶ崎へ行って、炊き出しのお手伝いをする機会があって。おっちゃんたちが震えた手におにぎりを私の手からもらっていくことが違和感があって、ありがとうと言われてすごく不思議に思っ、それでホームレスのおっちゃんたちが気になりました。
- (深尾) ショックだったんですね。
- (松本) うん、衝撃的ですね。全てタイミングの合致。12歳で釜ヶ崎に出会ったこと、19歳で、Homedoorを立ち上げた中高の先輩に声をかけてもらって。もともと、就職活動する気なくて、誰かの志ある人の右腕になりたいという願望が強く。
- (深尾) 滋野さん、就活しました？
- (滋野) 一応、ちょっとだけ…気持ち悪かったですね。夢がない、やりたいことがわからないという状況だったんですね。無理やり決めなさいというのが違和感あって、夢なかったらこの世の中生きていけないのかな？とか感じていました。大学院に進学して、何か研究しないといけなくなるとなると、今まで自分がもっているフィールドとか財産とか振り返って見たことないなと思っ、いろいろ活動はしていたけどその価値に気づいていなかった自分がいて、その中で財産であるおじいちゃんの家で始めようと思っことがきっかけ。
- (深尾) 逆に言うと夢っていうのは遠すぎて手応えはないんだけど、目標を下げたら、自分の周りにあるものに気づいた。スイッチは？
- (滋野) 今は正直に生きる。今あるものをちょっと立ち止まって見る。どうしても流れのままに行ってしまうことがあると思っけど、ある意味切羽詰まっどうしようか考えた時に今を正直に、わからないならわからないで、正直に生きる。
- (深尾) 今は正直に生きるっていうのは、実は若い人にとってはけっこうしんどいことですよ。正直に生きていきたいと思っているけど、自分の正直さがわからない、みんなと同じことをしていることで安心する。いろんなものに興味を持っっていうところでいうと、井上さんのスイッチは？
- (井上) インドでの出来事が衝撃的で、2週間のボランティアをして最終日に

ずっと仲良くしていた女の子に呼び出されたんです。全身で何かを訴えかけてくる姿と、塀に囲まれた施設だったので外に出ていないということが重なる、この子はいつ社会に出るんだろうと思っ。障がいをもった人との交流というのはそれまでほとんどなくて、初めて出逢った彼女たちの姿を見て、いつやってきて、いつ出ていくのか、いろんなことを考えた。

- (深尾) 異文化、自分が知らなかった社会の実像を見て思い知らされた。あの、上原さんは、誰かがやってくれたら素敵だけど、敢えてあなたがやらなくても。そこらへんも含めて何に突き動かされてやっているんですか。
- (上原) 初めの失敗が大学受験。どうしていかわからなかった中で、浪人だけの私塾塾で一年過ごしたんですね。4人1組の部屋で、みんな社会に対しての目標があったんですね。俺も頑張らないと思っって勉強した。いざ大学入って見て、浪人時代の仲間と大学生のギャップがすごかった。浪人時代の仲間たちって夢あって邁進しているけど、普通の大学生そんなこと思っていない。なんで俺こんなところで頑張らないといけいないんだろうと、うつになってしまった。浪人時代の友達から呼び出されて、「俺らはお前の背中に助けられたんだ。」と言われた。そんな時に会っったのがビジネスドラゴン。Nothing ventured, nothing gained. 挑戦しないと意味がないって言葉があって、そこから視野が広がっているんなら考えの人に会っ、日本のビジネスで世界に負けたくないし、好きな日本を明るい国にしたいという思っで挑戦している。
- (深尾) 出てきたスイッチとかきっかけというところで、共通するところあったなと思っます。挫折とか、いじめとか夢がないとか、ある意味でネガティブな状況をこの人たちはきっかけにしていたり力に変えていたりする。あと一つはギャップというところがあったんじゃないかなと思っます。辞めようとか迷ったときとかありません？
- (松本) おっちゃんたちの声が直に聴きとれる、私自身もそれに向き合えるので、心折れずにやっていられるのかな。
- (深尾) 当事者と向き合っているということが、突き当たった時に越えていける。今日の4人の方素敵だなと思っるのは、総じて収奪されていないというか、自分で悩んだり考えたりしているということを感じました。



これまでの社会の価値観に立ち向かう

- (深尾) 軟弱とか草食とかゆとり世代とか世の中言うじゃないですか。ゆとり世代とかよく言われますか。
- (井上) どちらかと言うと若者として大切にされたので言われてこなかった。ゆとりだからというのには要らないと思っし、それを拭おうと頑張った世代なんじゃないかな。
- (上原) それは、あると思っ。言われたくない。
- (滋野) いま、社会につぶされる瞬間がいつ来るのかとドキドキしている。いつ潰されてベシヤンコになるのかという不安を抱えている。
- (松本) 私はゆとり世代の成功例としてとりあげられることがあって気持ち悪い。成功例失敗例の区切りがわからない。
- (深尾) 隣の滋野さんは、潰される瞬間がいつ来るかって考えることがあると言っただけど、何かアドバイスを。
- (松本) 潰される瞬間が来るんだしたら、それに立ち向かったらいいだけじゃないですか。
- (深尾) 価値が変わってきている中で、みなさん方がこういう場が上がっているというのは、社会が気付こうとしている。素敵だねと言われることがビジネスになったり、同時に、今までの生き方や価値とのせめぎあいがある。立ち向かうための道具とか価値を共有していくことが大事ですね。私たちの社会全体が変わっていくために若い人たちの中にヒントがあるのではないかなと思っました。



?フロアから質問

- Q. 親御さんたちとせめぎあいながらまたは調和しながらやってこられたのですか？
- (井上) つい最近やっと話せたんですよ、親に。解ってもらえないなと思っていたけど、言葉にならなくても話し始めないと始まらない。
- (松本) 19歳のときにこれじゃばらばら生きていくと決めた。親に就活しないのかと聞かれて「しない」と言ったら「そっか、好きにしたら」と言っ理解してくれています。
- (滋野) 親とはいざこざがずっとありますよね。捨てきれないプライドがあって、葛藤があって親とぶつかった。
- (上原) 浪人時代に家族の大切さを感じて、親に手紙書いて、おやじが返事くれて、「応援してるよ」って。最近ではビジネスのこととか相談するようにして割と仲良くなった。
- (深尾) ぶつかるといっことは向き合うことですよ。ぶつかったり乗り越えているから続っけられるんだろうと思っます。



来場者へのエール

- (松本) 絶対自分を信じ続ける。私はおっちゃん一人ひとり信じたい自分を買っていきたいからここまでやってこれた。迷いとか不安とかあると思っけど、立ち返れるところは自分の心の内だと思っるので、自分の心を買ってやっただければ社会に良い影響を与えられるんじゃないかなと思っます。
- (滋野) 今は正直に。いま、目の前のことをやっていけば何とかなるのかなと思っている。正直な話、うまく行かなかったら辞めたいという感覚。フレキシブルな感じが大事。だからこそ、今思っていることを正直にやってほしいなと思っます。
- (井上) どれだけ挑戦できるのか、何も実績もなく肩書もない若者にとって大事。実績というのはこれからつくるもの、目標は今作れる。自分から大きな口を叩いて後付けでいかなと思っます。
- (上原) 挑戦という言葉が大事にしたい。失敗の先に成功がある。第一歩はいろいろ言われるけれど、一歩を踏み出すことを大事にほしい。
- (深尾) ギャップの中で乗り越えようともがきながら、自己有用観を持っつきかけにもなっている。知恵を共有しながら、つながりながら、信じるためにつながれたりアドバイスもらえたりしていいと思います。

最後に…社会を変えていくエネルギーへ

- (深尾) 非常に楽しい時間でした。やっぱり彼ら明らかに「変人」です。これは社会のいろんな価値と闘っている。滋野さんがいみじくもおっしゃいました。「つぶされるんじゃないか。」どこかに覚悟しながら闘っているんですね。ただこの人たちの動きがメインストリームになったら変人とは言っしません。社会を変えた人、変化を生む人たち。こういう人々を孤立させずに社会全体で応援できるのかということが大事になってきます。社会の中で若い人たちが置かれている状況は変わってきている。若者が感じている感覚、生きづらさみたいなものが、ネガティブなことをはねかえして力にしていっったように、社会を変えていくエネルギーになっていくのではないかなと思っました。